

プラバンダチンターマニ (II)

(物語の如意宝珠 その2)

原作：メールトゥンガーチャールヤ
(13、4世紀インド・グジャラート)

解説および日本語訳：新井俊一

解説

本稿は私が『相愛女子短期大学研究論集』第43号（平成8年3月発行）に発表した「ヴィクラマ王物語——『プラバンダ・チンターマニから』」の続刊である。本稿を読まれる人は、高校程度の世界史地図を持たれ、10世紀ないし12世紀ごろのインドを示す地図を参考にされることをお勧めする。その解説にも書いたように、「プラバンダ」とは8世紀ごろからインドで盛んに書かれるようになった、いわば偉人の叙伝であり、そこには著者の信じる価値観がふんだんに盛り込まれている。今取り上げる『プラバンダチンターマニ』は13、4世紀に西インドのグジャラート地方で活躍したジャイナ教シュヴェーターンバラ（白衣派）の学僧メールトゥンガによ

って編纂されたものである。物語の部分はおおむね古典サンスクリットに近いジャイナ・サンスクリットで書かれ、韻文の部分にプラークリット語であるジャイナ・マーハーラーシュトリー語やアパブランシャ語が現れる。物語の多くはグジャラートの諸王と、それに対抗したマーラヴァ（マールワー）の諸王の事績についてである。

前述のヴィクラマ王と、本稿の最初に現れるサータヴァーハナ王は、ヒンドゥー教徒の伝承では紀元前1世紀ごろ、それぞれ西インドのアヴァンティ（マーラヴァ）と南インドのプラティシュターナにあって敵対した王であり、最終



的には前者が後者に滅ぼされるが、『プラバンダチンターマニ』ではこのような敵対関係については一言も述べられていない。歴史上では「サータヴァーハナ」は紀元前3世紀の中ごろから紀元後3世紀前半まで南インドで栄えた王朝の名前であり、それが個人名として後世に伝わったようである。3番目のプーヤラージャ王は8世紀から10世紀前半にかけてカニャクブジャを首都として北インドに覇をとこなえたゲールジャラ・プラティーハーラ王朝の王であるが、これが王朝のどの王に当たるかは分からない。しかし、この物語の終わりから次の「ヴァナラージャの物語」にかけて、この偉大な王国が分裂して、西のゲールジャラ国と東のマーラヴァ国の対立が始まることが述べられている。

4番目のヴァナラージャ王は西暦744年頃グジャラート北部に首都アナヒッラプラを建て、チャーポートカタ王朝を創始した実在の人物である。そして5番目に現れるムーラージャ王が『プラバンダチンターマニ』の主題であるグジャラートのチャウルキヤ王朝の創始者である。この王朝は940年頃に始まり、1298年頃にイスラム教徒のアラー・ウッディーン・キルジの軍隊に攻め滅ぼされるまで続き、ヒンドゥー教およびジャイナ教の文明を守り通した。

これら中心となる諸王に関連して、さまざまな個人名とその伝記が現れる。どれももともとはヒンドゥー教徒である大衆の間に伝えられていた物語であったと思われるが、それらにジャイナ教の倫理観を巧みに植え付けている。単に物語の主人公をほめあげるだけでなく、彼らの人間的な弱さや失敗の話もおりこみ、文学作品としても人を引きつけるものがある。特にパラマラー王朝のムンジャ王の悲惨な最後の話は、当時の聴衆の涙をさそったことであろう。

もう一つ留意すべきことは、『プラバンダチンターマニ』がヴィクラマ王の物語から始まって、ヴィクラマ紀元の発祥を語り、グジャラートの諸王の事績にだけヴィクラマ紀元による年数をつけていることである。これは、ジャイナ教の理想の王であるとともに理想の人格でもあるヴィクラマの徳をグジャラートの諸王が継いでいるという考えのもとになされたことだと思われる。

なお、『プラバンダチンターマニ』には数種類の写本が伝えられているが、今は1933年に *Singhī Jaina Granthamālā* から出版された原典版に従った。

《プラバンダチンマーニ（Ⅱ）》

〔サータヴァーハナ王物語〕

さて、サータヴァーハナ王⁽¹⁾の気前の良さと知恵の深さについての物語を、伝承にしたがって語ってみる。以下は王の前世譚である。

ある時、光輝ある町プラティシュターナ⁽²⁾でサータヴァーハナ王が歩いているときに、町の近くの川で、魚が波のために岸に打ち上げられて、笑っているのに出会った。王は自然の状態に変動が起こったのではないかという恐れにおののき、すべての知者にこの疑いについて聞いた見たが、最後にジュニャーナサーガラ⁽³⁾というジャイナ僧に訊ねた。卓越した知恵を持ち、王の前世について通曉しているその僧は、王に次のように言った。「王よ、あなたは前世では貧しい家族に生まれ合わせ、外ならぬこの町で薪運びで生活をたてていた。そしていつも食事の時間にこの同じ川のところで、近くの岩の面でサクトゥ⁽⁴⁾に水を混ぜて食べていた。ある日あなたは、一か月の断食を終えようと町を歩いていたジャイナ僧に声をかけ、僧にサクトゥ団子の一つ与えた。この食事の施しという並外れた性質の徳によってあなたはサータヴァーハナ（施しを運ぶもの）と呼ばれる王として生まれた。そのジャイナ僧は神として生まれた。その神が神通力であなたを見て、以前は薪運びの生活をしていたあなたが王の身分になったのを知って、たいへん喜んで笑ったのだ。」

そして次の詩は、この話の要約として作られた。

魚の顔が笑ったとき、

聖人は恐れおののくサータヴァーハナに言った。

「前世でこの川で、あなたはサクトゥでジャイナ僧が断食を終えるのを助けた。

自らの神通力で、あなたを見て、魚は笑ったのだ」と。

サータヴァーハナ王は、自らの出生のことを思いだし、前世の状態を知って、その時から、物惜しみなない施与の政策を実行した。偉大な詩人や賢者を宮廷に集めることに熱心で、4連のガーター（偈頌）を金貨4千枚で買い求め、「サータヴァーハナ」という題の文学作品を編纂させた。これは700連ものガーターからなり、王が集めたガーターの宝庫である。さまざまな混じりけのない宝物を多く所有して、王国を長く治めた。⁽⁵⁾

〔正しい行為の誓いに関するブーヤラージャ王の物語〕⁽⁶⁾

話は次の通り。カニャクブジャの国は360万もの村からなっていたが、カリヤーナカタカという名の王都には、ブーヤラージャという王が君臨していた。ある早朝に王が王宮を歩いていると、雌鹿のような目を持った女が、ある屋敷の屋上の部屋の窓のところに立っているのを見て、その女を思いを焦がした。その女を、王の心を盗んだという罪で逮捕しようと思ひ、王はその仕事を自分の飲物担当の召使いに申しつけた。そこでその召使いは女を王宮に召し連れ、指定された場所に入れ、王に報告した。

王がその場所に来てその女を腕の中に抱きしめると、女は王に言った。「王様はあらゆる神々の化身であらせられます。それにもかかわらず、ああ、この身分の卑しい女を求めておられるのはどういうことでございますか。」

すると王は、この真実の言葉にいささか熱を冷ませられ、その女に「お前は誰か」と訊ねた。女は「私は王様の召使いでございます。」と答えた。王がさらに「それは間違いなく本当なのか」と問いつめると、女は「私は王様の飲物担当の召使いの妻でございます。私は王様の召使いの召使いなのでございます。」と言った。

彼女の言葉に心の中でたいへん驚き、王は愛の痛みから完全に解放され、その女を自分の娘と見なして釈放してやった。

自分の両手が彼女の身体に触れたことを思い、その手を罰しようと考え、夜に窓から両手を出していると、それを窓から侵入した男の手だと誤解した番兵が王の両腕を切ってしまった。

それから早朝なって、大臣たちが番兵どもを逮捕しようとしているのをやめさせ、王はマールヴァ国のマハーカーラ（シヴァ）神の神殿におもむき、一人で神に祈りを捧げた。神命により、王は自分の両手を再び取り戻した。マールヴァ国を王宮とともに神に捧げ、パラマール・ラージプート王家をその国の保護者に任命し、自分は世を捨てた行者となった。⁽⁷⁾

以上が正しい行為の誓いについてのブーヤラージャ王の物語である。

〔ヴァナラージャ王と、チャーポートカタ諸王の物語〕⁽⁸⁾

前述のカニャクブジャの王国に所属する国々のうちにグールジャラ族の国⁽²⁾があった。そのグールジャラ国のヴァディーヤーラ地方のパンチャーシャラ村にチャーポートカタ氏族に生まれた赤ん坊の男の子がいた。ある日、母親がその子をヴァナ⁽⁹⁾という木にかけた揺りかごにいれたまま、薪を採りに行った。その時、シーラグナスーリ⁽⁴⁾という名のジャイナ教の師がたまたま通りかかり、昼過ぎだというのに木の陰が男の子のところから去らないのに気がついた。それは揺りかごの中の男の子の徳の力だと考え、その子が将来、ジャイナ教団の優れた指導者になることを望んで、師は母親にながしかのお金を生活費と

して与えて、その子をつれ去った⁽¹⁰⁾。その子はヴィーラマティーという尼僧の手厚い保護の許に育てられ、師からヴァナラージャという名前を与えられた。

ヴァナラージャは8才の時に、神々の礼拝を混乱に陥れていたネズミを見張るように申しつけられた。彼はネズミを矢で殺してしまい、師から禁止されたけれども、あのネズミは第四の方便⁽¹¹⁾で扱うべきだ、と歌うように言った。彼の師は、ヴァナラージャの星位が生まれつき王になる運命にあることを指し示していることを知り、彼が必ず偉大な王になることを確信して、再び母親に戻してやった。母親と一緒に彼は無法者の集団の村に住みつき、泥棒を生業とした叔父に従って四方八方に侵入した。

ある時、カーカラ村でシャベルで穴を掘ってある商人の家に侵入して財物を奪っているときに、手が凝乳（カード）の壺の中に入ってしまった。そこで食事を供されたのだと考え、すべてをそこに残して去った。次の日、その商人の妹のシュリーデーヴィーが兄の親愛の意を受けて密かにヴァナラージャを招待した。「どうして私の家に入ったのに、何も取らずに全部残して去ったのか」と聞かれて、次のように答えた。

心に怒りを持つ者でさえ、
その相手の家で、自分の手が青蓮華の花びらの
柔らかさを持つまでに湿された時、
どうして害を加えることを考えられようか。

彼のこの言葉を聞いて、シュリーデーヴィーは彼の気概に驚き、ヴァナラージャに食べ物や衣服や贈り物を与えた。彼は「私の戴冠式の時には、あなたに私の妹としてティラカ⁽¹²⁾をつけていただく」と約束した。

それからある時、彼がまだ放浪者の生活をしているとき、仲間の盗賊が森の中でジャンバという名の商人を拘束した。その商人は3人の盗賊を見て、自分の持っていた5本の矢のうち2本を折ってしまった。盗賊たちにそのことを聞かれ、ジャンバは「お前たちが3人だから、あとの2本は用がない」と言った。そう言って、彼は彼らに言われるままに、動物的に矢を放って当てた。3人は大いに喜び、商人をヴァナラージャのところに連れてきた。ヴァナラージャは彼の戦士としての知識に驚き、「私の戴冠式の時には、私の首相となってくれ」と言ってから自由にしてやった。

それからある時、カニャクブジャからその国の王の娘マハナカーの衣装料を集めるためにパンチャクラ官（代官）⁽¹³⁾がやって来た。その王は娘にゲールジャラ国を与えていたので、そこから貢納品を集めに来たのである。その代官はヴァナラージャという人物を自分の槍持ちにした。6カ月にわたって代官はその国から貢物を集めた。240万もの金貨と4000頭もの上質の馬を獲得して、代官はカニャクブジャに向けて出発した。ヴァナラージャは

サウラーシュトラと呼ばれる峠でその代官を殺し、王に対する恐れから1年間深い森の中に隠れていた。

それから、自分の戴冠式のために王都を建設したく思い、強力な土地を探していたとき、パルヤーダサーカダの息子でアナヒッラという者がピーパルラー池の畔で気持ちよく座っていた。その子に「何を探しているんですか」と聞かれ、ヴァナラージャの部隊の長が答えた。「町を造るのに適当な強力な場所を探しているんだ。」するとアナヒッラは「もし私の名をその町につけてくれるのなら、そのような土地を教えてあげましょう」と言い、ジャーリの木の前に行き、そこが、野兎が犬を蹴散らしたほど強力な土地だと知らせた。その土地に、ヴァナラージャはアナヒッラ⁽¹⁴⁾という名の町を造らせた。

ヴィクラマ紀元802年にヴァナラージャはそのジャーリ樹のところに宮殿を造らせた。戴冠式の時に、ヴァナラージャは以前に会ったカーカラ村に住む女性を招き、彼女の手でティラカをつけてもらった。戴冠式を行ったとき、彼はほとんど50才であった。また、ジャーンバという商人を首相に任命した。パンチャーサラ村からシーラグナスリーを招き、敬愛のあまり師を自分の王座に座らせた。大いなる感謝の気持ちから、王は師に7郡からなる自分の王国をさしあげようとしたが、欲望を完全に離れたシーラグナスリーに何度も何度も辞退された。恩返しの気持ちから、師の指示に従って、ヴァナラージャはパンチャーサラという名の寺院を造らせ、シュリー・パールシュヴァナータ⁽¹⁵⁾の像で荘厳し、それを礼拝する自分の像をそばに侍らせた。また宮殿の中に、カンテーシュヴァリー寺院を造らせた。

このゲールジャラ族の王国は

まさにヴァナラージャの時から

ジャイナの教えによって建てられたので、

その敵どもは全く面白く思っていない。

ヴィクラマ紀元の802年からヴァナラージャは59年2カ月21日間統治した。ヴァナラージャの寿命は109年2カ月21日であった。

862年、アーシャーダ月⁽¹⁶⁾の明るい半分の3日木曜日、月がアシュヴィニー星座と獅子宮を通ったとき、ヴァナラージャの息子ヨーガラージャの戴冠式があった。

この王には王子が3人あった。ある時、そのうちの一人クシェーマラージャという者が王に次のように報告した。「外国の王の船団が激しい嵐に吹きよせられて、他の海岸からソーメーシュヴァラパッタナ⁽¹⁷⁾に集結しております。そこには、1万頭の上質の馬と、1軍団半の数の象がおります。そのほかに、1千万ルピーにもものぼる商品があります。これら

すべてが、我国の真ん中であって、我国の方にやって来ます。もし陛下が私に命令を下されば、それらを持って参りましょう。」王はそのように報告を受けても、その財物を略奪するのを禁止した。

そのあと、その3人の王子は、王が老齢のために気が弱くなったのだと思い、自分達の軍勢を国境近くの荒れ地に集結させて、こそ泥のようにそれらのものをすべて略奪して、父王の面前に持ってきた。心に怒りを抱いたけれども、王は何も言わず彼らに何の返答もしなかった。それらをすべて王の所有にして、クシェーマラージャは王に、その行為が高貴なものか下賤なものかと訊ねた。王は答えた。「もし高貴だと言えば、私は他人の財産を略奪する罪を犯すことになる。もしそれを下賤な行為だと言えば、私はお前たちの心を離反させることになるだろう。だから私は沈黙がもっとも好ましいことだと決めたのだ。お前が初めに訊ねたとき他人の財産を略奪することを禁じた訳を言ってやろう。他の国々では、諸王は他の王達の政治を誉めあっているが、彼らはグールジャラ国には盗賊の政府があると行って我々を笑っている。外国に駐在している我が家来からこのような報告を受けるとき、我らは自分の祖先の恥を思い出して痛みに身を焼かれる。もし祖先の汚点がすべての人々の心から忘れられれば、我らも諸王の中で『王』という言葉を克ち得るであろう。お前たちは少しばかりの富をむさぼって、我が祖先の汚点をわが身にもたらし、それを新しくしたのだ。」

その後、王は武器庫から自分の弓を持ち出して王子たちに「お前たちのうちで力の強いものがあれば、この弓に弦を張ってみよ」と言った。全力を振り絞っても誰もその弓に弦を張ることができなかった。そこで王は簡単に弦を張って、次のように言った。

「王の命令を破る、

従者から生活のかてを奪う、

そして妻から離れて寝る、

これらは武器を使わずに殺人を犯すことだと言われる。

この『ニーティシャーストラ（法の書）』に基づけば、王の命令を破って、武器を使わずに殺人の罪を犯した我が息子たちに、どんな罰が適当であろうか。」

それから王はこの世から去るべく断食をした後、120才になったときに葬儀の薪のうえに上った。この王によって栄光あるヨーギーシュヴァリー寺院が建立された。

この王は35年間統治した。ヴィクラマ暦897年からクシェーマラージャが25年間統治した。922年からブーヤダ王が29年間統治した。この王はブーヤデーシュヴァラ寺院を王都に建立した。951年からヴァイラシンハ王が26年間統治した。976年からラトナーディティヤ王が15年間統治した。991年からサーマンタシンハ王が7年間統治した。

このように、チャーポートカタ王朝には7人の王がいた。ヴィクラマ王の時から数えて、998年たった。

象は役に立たず、

山は翼を失い、

亀は怠惰の喜びにふけり、

この大蛇の王は二枚舌。

創造主（ブラフマー神）がこのように考えたとき、

夕刻の祭の水を保つために

あわせられた両手（チュルカ）から

光輝く剣を持って、大地を支えるべく

起こった者があった。かの偉大な勇者である。⁽¹⁸⁾

〔ムーララージャの物語〕

前記のブーヤラージャ王に始まる王家に、ムンジャーラデーヴァ王があった。王には同腹の息子が三人あり、名前をそれぞれラージャ、ビージャ、ダンダカといった。三人はソーマナータ神⁽¹⁹⁾に参詣して帰国の途上、アナヒッラプラまで来ると、サーマンタシンハ王が乗馬の練習をしているのを見た。王が馬に鞭をあてるにつれて、巡礼の服装をしていたクシャトリヤのラージャは、王が頻繁に鞭をあてるのに痛みを感じ、首を振って「ハー、ハー」という声を出した。

王にその理由を訊ねられ、ラージャは「陛下の馬はすばらしい足運びをしていますのに、陛下は馬の足運びの性質を考えないで鞭をあてておられます。それで私はひどい痛みを覚えたのです」と言った。その言葉に驚いて、王はラージャにその馬に乗るようにと命じた。王は馬と騎士の息がぴったりあっている様を見て、馬が歩を進めるたびに感嘆の声をあげた。王は、そのような身の動きを見てラージャの高貴な出自を知り、リーラーデーヴィーという名の妹をラージャに娶せた。

リーラーデーヴィーは、身ごもってからしばらくして突然死んでしまったので、大臣たちはお腹の子も死ぬことを考え、彼女の子宮を切り開き、子どもを取り出した⁽²⁰⁾。「ムーラ」の星座に生まれたのでその男の子はムーララージャと名付けられた。ムーララージャは生まれたときから登り立ての太陽のように光輝に満ちていたので、すべての者に賞賛され、剛勇によって母方の叔父である王のために王国の領土を広げた。

それから王は酒に酔っているときにムーララージャを王位に就け、酔いから醒めたときに彼を王座から除けた。この時から「チャーポートカタの贈り物」という言葉が揶揄をも

って広く使われるようになった。このようにムーララージャは叔父の王から毎日からかわれていたが、ある日家来に戦いの準備をさせ、正気を失った叔父に王位に就けられたときに叔父を殺し、自ら正当な王となった。

ヴィクラマ紀元993年アーシャーダ月⁽²¹⁾の明るい半分の15日木曜日、月がアシュヴィニー星座とシンハ黄道にあった時、夜の第二当直時間にムーララージャの戴冠式があった。21才であった。

ある時、サパーダラクシャ⁽²²⁾の王がグールジャラ国の国境に現れ、ムーララージャを攻撃してきた。同時に、タランガ国王⁽²³⁾の将軍バーラパも侵入してきた。ムーララージャが大臣達と、もしふたつの敵の一方と戦えば他の敵に後ろから攻められるであろうと議論しているときに、大臣達が言うことに「我々がカーンター砦に入って数日間持ちこたえれば、ナヴァラートリの祭⁽²⁴⁾になって、サパーダラクシャの王は王家の女神を祭るために、自分の都のシャーカンバリーに戻るであります。その時にバーラパ将軍を撃破いたしましょう。その後サパーダラクシャの王が戻ってくればそれに対処できるでしょう。」この言葉を聞いたとき、ムーララージャは「そんなことをすれば、私は逃亡したと言って世界中で責められないだろうか」と聞くと、大臣達は次のような詩を詠んだ。

小羊は前に飛び出すために一度退却をする。

ライオンも飛び上がるときには、憤怒のために身体を縮める。

心に闘争心を保ち、密かに作戦を練りながら

賢者は何事にも耐え、心に介しない。

大臣達にこのように進言されて、ムーララージャはカーンター砦に入った。

サパーダラクシャの王は雨期をグールジャラ国で過ごし、ナヴァラートラの祭りがやって来たときに、シャーカンバリーの町を王の本営その場所に設定し、王家の女神を招来して、まさにそこでナヴァラートラの式を始めた。

ムーララージャ王は自らの状況を考え、大臣達の知恵のなさを悟って、その時に起こった超人的な決断力をもって勅令を書き始め、命令によって四方八方から藩王たちを召集した。お金を払って偽の家系録を作らせる役のパンチャクラ大臣の口を通じて、すべてのラージプートと兵士達を高貴で純血の家系の出自と言って誉めたたえ⁽²⁵⁾、彼らの言うままの贈り物や他のことで彼らをてなづけ、ある時を指定して彼ら全員をサパーダラクシャの王の本営近くに展開した。

前もって決められた日にムーララージャは自分の最良の雌らくだに乗り、らくだ番とともに密かにサパーダラクシャの王のテントに入り、らくだから降り立った。ただ一人で手に短刀を持って、ムーララージャは門番に言った。「王にとって今は何時なのだ。お前の王

にムーララージャが寝所の入り口に入ったと言え！」と言って、利き腕で一撃を与えて門番を入り口のあたりから追い払い、大声で「ムーララージャがここに参った」と言っている。ちばん奥の部屋に入り、王のベッドの上に座った。

サパーダラクシャの王は恐怖に打たれてしばらく黙っていたが、恐れを少しばかり払いのけて、「そなたは本当にムーララージャなのか」と聞いた。ムーララージャの「そうだ」という応えを聞くと、王はもうその場にふさわしい言葉をまったく考えることができなくなった。その時、王の居室は、すでにムーララージャに意を通じていた4千もの歩兵達に完全に包囲されていた。

そこでムーララージャが王に言った。「私に戦場で立ち向かう勇気のある王がこの世界にいるものかどうか考えているところに、私の願いがかなったのか、汝がやって来てくれた。ところがティランガ国の王タイリバの将軍が、食事時に襲ってくる蠅のように私を滅ぼそうとして攻め込んできた。私がここに来たのは、汝にしばらく動かないようにしてもらうためである。私がああ将軍を痛い目にあわせている間、汝は後ろから攻めるような行為はつつしんでもらいたい。」

そのように言われてサパーダラクシャの王が次のように言った。「そなたは王であるにもかかわらず、一人でこのように並みの兵士のように敵王のテントの中に入り込んできた。それでそなたとは終生の平和を講じよう。」

するとムーララージャは敵王の言葉を遮って「そんなことを言わなくてもよいのだ」と言った。食事への招待をすげなく断って、ムーララージャは片刃の剣を手に持ち、かの雌らくだに乗って、自分の軍勢が取り囲んでいたバーラバの陣営に攻め込んだ。ムーララージャはバーラバを滅ぼし、1万頭の馬と18頭の象を手にいれた。ムーララージャが自分の陣営を整えている間に、その知らせを密偵の口から聞いたサパーダラクシャの王は自分の国に逃走した。

ムーララージャは首都のパッタナに、ムーララージャ寺院を建立し、祖父のムンジャーラデーヴァのためにも寺院を建立した。王はシヴァ神への信仰があつく、毎週月曜日にならずソーメシュヴァラ寺院に巡礼の旅をしたので、ソーマナータ神は王の信仰に大いに喜び、前もって王に知らせた後、マンダリーの町に降臨した。王はその町にムーレシュヴァラ寺院を建立した。王が毎日その寺に参詣して神を賛嘆供養したので、神は大いに喜び、王に「私は海とともに汝の町に降臨しよう」と告げた。そのように言って、かの神は栄光ある町アナヒッラブラに降臨した。神とともにその町に降りた海のおかげで、その地域の湖や池の水はすべて塩気を帯びることになった⁽²⁶⁾。ムーララージャはトリプルシャ寺院を建立した。

その後、その寺院の首席神官に適当な苦行僧を求めていると、カーンタディという苦行僧のことを聞いた。その苦行僧はサラスヴァティー河⁽²⁷⁾の岸で一日おきに断食をし、食べ

るときは、自分のために特別に作られたものでない、乞食で得られたものしか食べていなかった。

王がその苦行僧に敬意を表するために会いに行くと、三日熱のおこりを患っていたその僧は、熱を自分のぼろ切れを縫い合わせた衣に移した。王がそれに気がついて、僧に「どうしてあなたの衣がふるえているのでしょうか」と訊ねた。すると僧は「熱でふるえていたら王と話ができないから、熱を衣に移したのだ」と答えた。その答えを聞いて、王が「これだけの力を持っておられるのなら、熱を完全に除いてしまえばいいですか」と訊ねた。王のこの問に答えて、苦行僧は『シヴァ・プラーナ』から次の詩を引用した。

過去世で積み上げた病は、どのようなものであれ、
我が上に現れよ。
借財をすべて返済して、
シヴァ神の最高の住処に参ろうと思う。⁽²⁸⁾

「『業は費やさなければ、減ることがない。』——このことを知っていて、どうして自分の業を捨て去ることができようか。」

苦行僧がこのように言ったとき、王はトリプルシャ寺院の神官を引き受けてくれるよう依頼した。すると僧は、

(地獄に落ちるには) 官に就けば3カ月、
寺の主として3日間、
さらに速く地獄落ちを望むなら
王の神官として1日間。

「聖典のこの言葉を知りながら、生死の海を苦行の筏で渡った私が、どうして汚泥の水たまりで溺れることができようか。」この言葉によってかの苦行僧は王の要請を断った。

すると王は、焼いた小麦粉に銅版勅書を包ませて、その僧が乞食に来たときに、それを乞食鉢に入れさせた。僧は知らないまま、はじめにいたところに戻ろうとした。乞食にでる前は道がきれいであったのに、帰りにはサラスヴァティー河の氾濫で通れなくなっていた。生まれた時以来の自分の犯した罪を思い返しながらか、乞食で得た食べ物に何か汚点があるのかと調べてみると、中を見たとき、王によって与えられた銅版勅書を見つけた。

その後、その大苦行僧が怒っていると知って、王はなだめるために会いに来たが、王がその場にふさわしい言葉を発したとき、苦行僧は「私はあなたの銅版勅書を右手で受け取ったから、それを無視することはできない」と言って、王に自分の弟子のヴァヤジャッ

ラデーヴァと言う者を引き合わせた。ヴァヤジャッラデーヴァは次のように答えた。「身体を清めるために毎日、良質のサフロンを8パラと、ムスク（麝香）を4パラ、カンファー（樟脳）を1パラをください。さらに巫女を32人と白の傘と村一つを下賜くだされば、主席神官の職をお受けいたしましょう。」

王はその申し出にすべて合意し、トリプルシャ大寺院でヴァヤジャッラデーヴァを全苦行僧の主の地位に就かせた。彼は「カンクーローラ」（パニック草の実を好む者？）という名で有名である。ヴァヤジャッラデーヴァはこれらの贅沢を楽しんだが、まことの禁欲生活の誓いをかたく守っていた。ある夜、ムーララージャの妻が彼の誓いの堅さを試すために近づいてきた。彼はキンマの葉の一振りによって彼女を癩患者にしてしまったが、彼女が心から詫言したので、自分の塗り香を彼女の身体に塗り、彼自身の沐浴のために用意された水で彼女の身体を清めて、もとの身体に戻してやった。

次にラーカーカの興起と滅亡の話をするにすることにする。これより前、パラマラー王家のキールティラージャデーヴァ王にカーマラターという娘がいた。子供時代に彼女が友達とある寺の前で遊んでいると、カーマラターは友達に夫を選ぶようにと言われた。真っ暗な中でよく見えなかったので、カーマラターは自分のしていることがどういうことかも考えず、寺の柱の陰に立っていたプーラダという牛飼いを選んだ。その後数年たって、彼女は最良の夫に娶られるはずであったが、夫への貞節の誓いを守るため²⁹⁾、彼女は辛抱強く両親を説得してプーラダと結婚した。二人の間に生まれたのがラーカーカである。ラーカーカはカッチャ地方の王となり、信仰したヤショーラージャ神の強力な助けもあって至るところ敵がなく、ムーララージャの軍勢を11回打ち破った。しかしある日、カピラコッタ城にいたとき、ラーカーカは王自身が率いる軍勢に包囲された。そこでラクシャ³⁰⁾は、マーヘーチャという勇猛な將軍で、他のところを攻撃するために派遣していた者を呼び戻そうとした。ムーララージャ王はこの状態を観察して、マーヘーチャの帰り道を閉鎖した。マーヘーチャは自分の務めを果たしてそこに戻ってきたときに、王の家来達に武器を捨てるように命令された。自分の主人に対する義務を果たすためにマーヘーチャは武器を捨て、戦闘準備をしているラーカーカの許におもむいて敬意を表した。

それから戦闘の時になって、ラーカーカは数々の知恵にあふれた言葉を発した。たとえば、

勇気で熱くなっていないとき、

打ち破られたラクシャは言う

数えれば自分には何日が残っているのか

10日か8日か。

ラーカーカはマーヘーチャ將軍の偉大な戦いぶりを見てさらに勇気を得て、ムーララージャと一騎打ちをした。3日たって、ムーララージャはラーカーカの破りがたいのを知り、4日目にソーメーシュヴァラ神に心で祈り、その時に降りてきたルドラ神の一部分の助けをかりて、ラクシャを殺してしまった。戦いで地面に倒れたラーカーカの、風にそよぐ髭を王が足で触れたとき、ラーカーカの母親が王に呪いの言葉を浴びせかけた。「お前の一族はルーティ病で滅びるであろう。」⁽³¹⁾

ラクシャの犠牲祭を、
自己の栄光の火によって行った者は
ラクシャの妻たちの、
涙の日照りに終わりをもたらした。⁽³²⁾

カッチャの王ラクシャを巨大な網で捕らえて
強力な力で殺し、
戦闘の海の中で
(ムーララージャは) 優れた漁夫の腕を見せた。

この地上において、「物惜しみなさ」という名の木は
バララーマを打ち破ったバリとして現れ、
ダディーチとして根を張り、ラーマとして芽を吹き出し、
太陽の息子として大小の枝を広げ、
ナーガールジュナとして少しばかりつぼみをつけ、
サーハサーンカとして花を咲かせた。
根が十分に張ったとき、ムーララージャよ、
汝の中に実を成らせた。⁽³³⁾

雨期には雲がもたらす水に清められ、
繁ったベント草の群生をクシャ草として得て、
水路から溢れる水でさかんにアンジャリをして、
汝の敵の宮殿は毎日、その主のさまよえる魂の為に
シュラーッダのお祭をしている――
捧げるピンダは至るところで崩れている壁の土。⁽³⁴⁾

以上がプーラダの息子ラーカーカの興起と滅亡の話である。

このように、ムーララージャは王国を55年間何の刺もなく支配したが、ある日、神像の前で灯を揺らせる夕刻の祭の後、王は一人の召使いにピンロウジの実を与えた。召使いはそれを両手で受け取ると、その中に虫がいるのを見つけた。王はその状況を真剣に考えて、世の中に嫌気がさし、世を去ろうと決心した。自分の右足の親指に火をつけた後、8日の間、象を与えることから始めて大きな喜捨を行った。

自制のみに服従する者は、
足に火をつけて煙が髪の毛のように上がっても、
全くものともしなかった。
日輪をも貫いた者がいるのに
他の勇者のことを話す必要がどこにあるのか。

王はこのような頌詩で賛嘆されながら、天に昇った。
ヴィクラマ暦998年から55年間ムーララージャ王は王国を統治した⁽³⁵⁾。これがムーララージャの物語である。

ヴィクラマ暦1053年から13年間チャームンダラージャが統治した。
1066年から6カ月間ヴァッラバラージャが統治した。
1066年から11年6カ月ドゥルラバラージャが統治した。このドゥルラバ王によって首都パッタナにドゥルラバ湖がつくられた。

その後、ドゥルラバラージャはビーマという名の息子を王位につけ、自分は聖なる沐浴場に参拝すべくヴァーナラシー⁽³⁶⁾におもむこうとした。マーラヴァ国に着くと、その王ムンジャに「王者の印であるチャトラやチャーマラ⁽³⁷⁾を捨てて、巡礼の衣装をつけて町から出て行け。さもなくば、戦いの用意をしろ」と言われて、ドゥルラバ王は正義に妨げが起こったと感じ、この知らせを詳しくビーマ王に送り、自らは巡礼の姿で聖地に行き、あの世に至った。

その時以来、グールジャラ国の諸王とマーラヴァ国の諸王の根元的な敵対関係が始まった。

〔ムンジャ王の物語〕

さて、今話したマーラヴァ国の光輝あるムンジャ王⁽³⁸⁾の事績について話そう。これより前、パラマーラ王家に属するシンハバタという名の王が王都を歩いていると、藪の中に特別に美しい姿を持った生まれだての男の赤子を見つけた。まるで自分の子どものように心を引かれ、王はその子を宮殿に連れて帰り、王妃に世話を任せた。その子が見つかった状

況にちなんで、ムンジャという名前をつけた。その後、王にはシーンダラという名前の息子が生まれた。ムンジャには王となるべき完全無欠な徳を備えていたため姿はとて美しく、王はムンジャの即位式を行うことを望み、彼の宮殿を訪れた。ムンジャはとて恐れ入って自分の妻を籐の椅子の後ろにかくし、王を恭しく迎え入れた。

王は二人きりになったと思い、ムンジャの話を始めから語った。「わしはお前の誠実さがうれしいから、自分の息子を差し置いてお前に王国を与えようと思っているのだ」と王は言った。「しかしお前は弟のシーンダラを親切に扱わねばならぬ。」この指示を与えた後、ムンジャを王位につけた。ムンジャは自分の出生の秘密が他人に知られることを恐れて、自分の妻をさえ殺してしまった。その後、ムンジャは勇猛さでもって諸国を征服し、多くの賢者の主となった。彼にはルドラーディティヤという大臣がおり、国事を任せていた。弟のシーンダラは誇りが高く王の命令に従わなかったため、ムンジャは彼を国から放逐し、王国を長い間統治した。

かのシーンダラはグールジャラ国に到り、カーシャフラダナガラの町の近くに小屋を立てた。光の祭の夜、狩りに出かけた。盗人たちの仕置場の側を歩いている猪を見つけたが、死刑の杭から落ちた盗人の死骸には気がつかなかった。膝で身体を支えて猪に矢のねらいを定めたとたん、その死骸が彼に話しかけた。するとシーンダラはその死骸が自分の手に触れないようにして、矢で猪を討ち取った。彼が猪をもって帰ってきたとたん、その死骸が立ち上がり大声で笑った。シーンダラは「お前がわしに話しかけたとき、お前はわしの矢が猪を射つことを望んだのか、それともお前に気がついてお前を射つのを望んだのか」と言った。この言葉が終わると、いつも他人の弱点を探しているそのプレータ³⁹は、シーンダラの無限の勇気に喜び、願い事を一つ聞いてやろうと言った。それを聞いてシーンダラは「わしの矢が地に落ちることのないように」と言った。しかしこの願い事をしてから、プレータがもう一つ願い事を言えと言っているのを聞いて、「我が両手にすべての好運が到るように」と言った。彼の勇気に驚いて、そのプレータが言った。「あなたはマーラヴァ国へ戻りなさい。かの国ではムンジャ王がもうすぐ破滅を迎えようとしています。だから、あなたは帰らなければなりません。そうすると、王位はあなたの血筋にもたらされるでしょう。」

このようにプレータに勧められて、シーンダラはマーラヴァ国に戻った。ムンジャ王の了解のもとに生活を支えるための土地をいくらかもらったが、再び度を外れた振る舞いをしたために、ムンジャ王に両眼をえぐり取られ、木の獄舎に閉じこめられた。その時にボージャという名の息子を得た。ボージャはすべての文学作品を完全に学び、王位にふさわしい36種の武器の使用法を修得し、72種の技の大海を渡りきり、身体に王たる者の印をすべて備えて、並ぶ者のない若者に成長した。ボージャが生まれたとき、ある占星学者が彼の運勢について次のように言った。

55年と7カ月と3日間、
ボージャはガウダを含めたダクシナーパタを
享受するであろう。⁽⁴⁰⁾

この詩の意味を知って、ムンジャ王は、この赤子が生きておれば、自分の息子が王になれなくなることを恐れ、何人かの最も下賤な生まれの者に赤ん坊を託して、殺すようにと命令した。その夜、それらの者はボージャのこのうえなく愛らしい姿を見て哀れみの心を起こし、身体を震わせながらその子に、望みの神を念ずる⁽⁴¹⁾ように、と言った。すると、その子は次の詩を一葉の紙に書き付けた。

クリタユガ⁽⁴²⁾の栄光ある王マーンダートリは
去ってしまった。
大海に橋を作って、10の口を持つ者を征服した王⁽⁴³⁾は
今はどこにいるのか。
そしてまた、ユディシュティラに始まる他の王⁽⁴⁴⁾たちは
どこへ行ってしまったのか。ああ、我が君よ、
あなたが現れるまでは、どの王とも歩むことがなかった大地は、
あなたとともに歩むでしょう。⁽⁴⁵⁾

この詩を書いて、その少年は彼らを通して王に届けてもらった。王はこの詩を見たとき、心が悔恨で一杯になり、涙を流してその子どもを殺させた自分を責めた。

それから王は最大の敬意をもってその子を連れて戻らせ、彼を皇太子の地位につけた。

ムンジャ王はティランガ国⁽⁴⁶⁾の王タイリパデーヴァの送った軍隊に繰り返し攻撃を受けていた。ムンジャは病気の総理大臣ルドラーディティヤに強く反対されたけれども、タイリパ王に対して進軍することを望んだ。ゴーターヴァリー河に到着したら決して渡河して軍を進めないという誓約をして禁止されていたにもかかわらず、自分はタイリパを以前に6度撃破したことがあると軽侮の目で相手を見、過剰な自信から河を渡り、軍陣をそこに張った。ルドラーディティヤはその知らせを聞いて、この過ちから近い将来に、王に災難が降り懸かるであろうと察知して、自ら葬儀の火の中に身を投じてしまった。

その後、タイリパ王は策略と軍勢を使ってムンジャの軍隊を完全に滅ぼしてしまった。ムンジャは捕らえられ、ムンジャ草の綱で縛られ、牢獄に入れられた。木製の獄舎に閉じこめられている間にタイリパの妹のムリナーラヴァティーの世話を受け、彼女と配偶者の

関係になった。ムンジャの家来達が後をつけて来て獄舎まで穴を掘り、彼に合図を送った。

ある時、ムンジャが自分の姿を鏡で見ている時に、気がつかないうちにムリナーラヴァティーが後ろに来ていた。彼女は鏡に映った自分の顔が老いのために衰えを見せているのを見て、側のムンジャの若々しい顔との違いに落ち込んでしまった。ムンジャは彼女のこのような状態を見て、次のように言った。

ムンジャは言う。おお、ムリナーラヴァティーよ、
若さを失ったことを嘆くでない。
砂糖は百分されても、
その粉は依然として甘い。

このように言った後、ムンジャは自分の国に向かって去ろうとしたが、彼女との別離に耐えられず、また何が起こるか分からないという恐れから、彼女に告白する事もできなかった。彼女に何度も何度も訊ねられたけれども、自分の心にあることを言わなかった。そして、塩気の全くない食べ物と、とても塩辛い食べ物を与えられても、その味に気づかなかった。

彼女に執拗でしかも愛を込めた声で哀願されたので、ついに「私はこの穴を通して自分の国に発とうと思っている。もしお前と一緒に来てくれれば、お前を王妃の位に就け、今までの親切への結果を見せてあげよう」と言った。すると彼女は「私の宝石籠を取って来ますから、待っていてください」と言った。そう言って、その中年の寡婦は、彼の国に行けば捨てられるだろうと思い、兄のタイリパ王にそのことを告げた。

ムンジャを特別に辱めるために、タイリパ王はムンジャを綱で縛り、毎日乞食をして歩かせた。家から家にさまよい歩きながら、世間に全く興味を失い、次の言葉を唱えた。

女が甘い愛の言葉を語るのは
他人の心を虜にするため、
そんな女に愛を打ち明ける男は
心に大きな悲嘆を持つ。

また、

打ち破られ、落ちぶれ、わしはなぜ死ななかつたのか。
なぜ灰の塊にならなかつたのか。
ムンジャはさまよい歩く、
猿のごとく紐で縛られ。

それからまた、

象もなく、戦車もなく、
馬も去り、兵卒も召使いもない。
ああ、天国に住むルドラーディティヤよ、
お前に会いたい、我を迎えよ。

それからまた他の時に、ムンジャはある家に乞食に連れて来られた。その家長の妻が、手に小さな壺を持ったムンジャに水を混ぜたバターミルクを飲ませたが、首に傲慢さを一杯表して、食べ物を何も与えなかった。そこでムンジャが言った。

愚かな女よ、手に小さな壺しか持たぬ男を見て、
そんなに驕るでない。
ムンジャは一千四百七十六頭の
象を失ったのだ。

長い間このように乞食に連れ回された後、王の命令によって、ムンジャは仕置き場に連れて行かれた。死刑執行人に、自分の望みの神を念ぜよ、と言われて、次のように言った。

ラクシュミーはゴーヴィンダの許に戻り、
強力な女神シュリーはその夫の住処に戻る。
ムンジャがあまたの栄光とともにこの世を去るとき、
サラスヴァティーは頼る者を失う。⁽⁴⁷⁾

このようにムンジャの言葉が多く口承で伝えられている。ムンジャを殺した後、タイリパ王は宮殿に杭を立てて、そこにムンジャの首を刺し、毎日その首にカード（凝乳）を塗り付けさせて、自分の怒りの心を満足させた。

栄光の蔵、象の主、そして
アヴァンティの王であるムンジャは
かつてサラスヴァティーの息子として生まれ、
それになつた行いをした。
ムンジャがカルナータの王に捕らえられたのは、
ただ自分の大臣の言葉の判断を誤ったから。
そして彼の首は杭に刺された。
ああ、不確かなるは運命の行く末。

それからマラーヴァ国では、この知らせを聞いた大臣たちによって、ムンジャの甥のボージャが王位につけられた。

以上が、「大慈悲心による他人の救済などの徳の宝石で飾られているヴィクラマーディティヤ王に始まる諸王の事績の話」と題されているメールトゥンガ作『プラバンダチンターマニ』の第一部である。

注

- (1)サータヴァーハナ王(Sātavāhana) —— 歴史上「サータヴァーハナ」は、紀元前250年ごろ南インドのデカン高原に起こり、紀元1世紀ごろ北インドも合わせて繁栄し、紀元230年頃滅びた王朝の名前である。通常のヴィクラマ伝説では、ヴィクラマーディティヤ王の敵として現れ、最後にヴィクラマを滅ぼす王として描かれている。今読んでいる『プラバンダチンターマニ』では、ヴィクラマ王の死後にヴィクラマの徳を受け継いだ王として簡単に紹介されている。
- (2)プラティシュターナ (Pratiṣṭhāna) —— デカン高原ゴダーヴァリー河の中流にある町で、歴史上サータヴァーハナ王朝の首都であった。
- (3)ジュニャーナサーガラ (Jñānasāgara) —— 「智慧の海」という意味の名前。
- (4)「サクトゥ」(saktu) —— 穀物の粉で、水を混ぜて団子状にして食べる粗末な食べ物。
- (5)今参照している原典には、この後、ジャイナ・マーハーラーシュトリー(Jaina Māhārāṣṭrī)語で書かれた10連の頌詩があるが、意味が不明のところがあり、物語の流れに何等影響を及ぼさないと考えられるので、今後の宿題として、今は割愛することにする。
- (6)ブーヤラージャ王(Bhūyarāja)の物語——ここから『プラバンダチンターマニ』の作者からあまり遠くない時代に生きた人たちの話になる。ここに現れるブーヤラージャ王は8-10世紀に北インドに覇をとなえたグールジャラ・プラティーハーラ王朝の王らしいが、歴史上の人物との比定は困難である。この王朝の首都はカニヤクブジャ(Kanyakubja - 中国名は曲女城)であり、文中の「カリヤーナカタカ」(Kalyāṇakāṭaka)はデカン高原にあった町の名であるから、伝承が混乱しているようである。
- (7)ここから、『プラバンダチンターマニ』の主題であるマラーヴァ (マルワ) 王国とグールジャラ (グジャラート) 王国の対立の歴史が始まるが、本書ではこの二王国が同じカニヤクブジャの王国から分かれたものとして描かれている。
- (8)チャーポートカタ王家(Cāpotkata)——西暦870年ごろから1051年まで実際にグジャラート地方の北部を支配した小王国。その地方の言葉では通常「チャウダCauḍa」と呼ばれており、

Cāpotkaṭaはサンスクリット化された形。

- (9)ヴァナ (vaṇa) ——サンスクリットにはない名詞で、意味は不詳。なおこの王の名ヴァナラージャの「ヴァナ」は「森」を意味するvanaであり、vaṇaとは異なった単語である。
- (10)厳しい禁欲生活を送るジャイナ僧たちは、当然子供を持ってないため、このように子供を買い取って後継者として育てたということもあり得る。
- (11)第四の方便——マヌ法典やヤージュニャヴァルキヤ法典などインドの伝統的な法典で述べられている敵に打ち勝つための戦略（ウパーヤ）で、4種類あり、第一は内紛の種子を蒔く、第二は交渉で打ち勝つ、第三は賄賂を送る、第四は正面からの攻撃。
- (12)ティラカ(tilaka)——額の真ん中に塗り付ける装飾的な印。
- (13)パンチャクラ(pañcakula)——「五軍、または、五郡を統括する者」という意味で、カニャクブジャのプラティハラー王朝の地方官もしくは収税官であつたらしい。ここでは「代官」と訳しておく。
- (14)アナヒッラプラ(Aṇahillapura)——「アナヒッラの町」という意味。現在のグジャラート州北部にあるパータン(Pāṭan)。
- (15)シュリー・パールシュヴァナータ(ŚrīPārśvanātha)——「シュリー」は「栄光ある、光輝ある」という意味の敬称。パールシュヴァナータはジャイナ教の歴史上の創始者Jina Vardhamānaに先だって存在していたといわれている23人の覚者(Tīrthāṅkara)のうちの第23番目。
- (16)アーシャーダ月(Āṣāḍha)——6月と7月に渡る月。この月に満月が同じ名の星座の近くを通るので、この名がつけられている。
- (17)ソーマーシュヴァラパッタナ(Someśvarapattana)——現在のサウラーシュトラ半島の西岸ソームナート(Somnāth)。ここにはソーマ神によって作られたといわれるシヴァ(Śiva)神のリングを祭った寺院が古くからあり、今でもヒンドゥー教徒の聖地となっている。また、紀元前から東西海上貿易での重要な港町であった。
- (18)象、山、亀、大蛇はそれぞれヒンドゥーの神話で大地を支えているとされている動物である。それらがすべて大地を支える力を失ったということは、すなわち、大地を支えているはずの王たちが徳と力を失ったことを言っている。そこで創造神のブラフマーが祭をするために両手を合わせて水をくんだ時に、その合わせられた両手（チュルカCulka）から、次に大地を支えることになる偉大な勇者が現れたというわけである。その勇者の家系は、Culkaの派生語としてのチャウルキヤCaulukyaという名で呼ばれるようになる。実際はこの王朝は地方語でソーランキー(Solāṅkī)と呼ばれ、それが権威づけのためにサンスクリット化されてチャウルキヤとなり、ブラフマー神に結び付けられたと考えるべきであろう。
- (19)ソーマナータ神——前述（注17）のソーマーシュヴァラ神と同じ。すなわち3人はサウ

- ラーシュトラのソームナートに参詣したのである。
- (20)古代ローマのジュリアス・シーザーの場合と共通する生誕譚である。ヴァナラージャの話にもあったが、古来、英雄や偉人は生まれたときから何らかの特異性が見られたとされる場合が多い。
- (21)ヴィクラマ紀元993年アーシャーダ月——西暦945年の6月から7月にわたる月。
- (22)サパーダラクシャ(Sapādalakṣa)——「125,000の村を持つ国」という意味。ムーララージャの王国（現在のグジャラート州）の北、今のラージャスターン州にあった強力なチョーハーンCauhān王国のこと。首都シャーカンバリー(Śākambharī)。
- (23)タランガ国——グジャラートの南、デカン高原の中央にあった西チャールキヤ王朝のこと。この場面でムーララージャは南北に敵を迎えたわけである。
- (24)ナヴァラートリの祭(Navarātri)——「九夜祭」。アシュヴィニーの月（現行の暦の9月から10月にわたる）の、月の明るい半分の部分の最初の日から9日目まで続くドゥルガー女神に捧げる祭。インド全域で行われる、ヒンドゥー教徒にとってはもっとも神聖な祭。
- (25)ラージプートと呼ばれる人々は7、8世紀ごろからインド史上に現れた。その祖先については不明であるが、ヴァナラージャのように武装した農民が流民の群れが、不安定な政治状況に乗じて王家にのし上がったものと思われる。いったん地域の勢力者になると、ここで言われているように、バラモンたちを雇って、古代の王家や神がみからの出自であるかのように家系や神話を作って権威を高めようとした。
- (26)これは、グジャラート州北部の井戸水がすべて塩気を帯びている事実を、神話で説明したのである。
- (27)サラスヴァティー河——グジャラート北部の乾燥地帯を西に流れて、カッチ湿原(Rann of Katch)に注ぐ河。
- (28)過去の業の結果をすべてこの世で清算して、清らかな身となってシヴァ神のもとに行きたいという意味。
- (29)神の前で誓ったことは、破ることができないため。
- (30)ラクシャ(Lakṣa)はラーカーカ(Lākhāka)のサンスクリット化された名前。どうして二つの名前が交互に現れるのかは分からない。
- (31)ルーティ病(Lūti)——何を意味するかは明確には分からない。一説には蜘蛛からでる毒素によって起こされる病気とも言われる。
- (32)ラクシャを犠牲に供したもの（ムーララージャ）は、ラクシャの妻たちを大いに嘆かせた、という意味。
- (33)王の最高の徳は、勇気と物惜しみのなさである。バリ(Bali)はヴィシュヌ神の化身バララマ(Balarāma)を破って三界を支配した魔神であるが、もの惜しみなく施しをしたとされている。ダディーチDadhīciは自らの骨を差し出して、インドラ神が大蛇ヴリトラを退治

するのに使った稲妻を作らせた。ラーマは叙事詩『ラーマーヤナ』の主人公で古代インドの理想的君主と言われる。ナーガールジュナは3世紀に南インドにでたバラモンで、後に大乘仏教の偉大な論者となった人（龍樹）であり、どうしてここに現れるのか理解に苦しむ。サーハサーンカは、前出のヴィクラマーディティヤ王のことである。この頌詩は、ムーララージャがこれら偉大な王達を超えた徳を持つ王であると讃えている。

- (34)全体として、ムーララージャによって滅ぼされた敵王の崩壊した宮殿の状態を言っている。クシャ草は神への犠牲祭に使う神聖な草であり、ベント草は荒地に生える雑草である。ベント草の繁っている様子が犠牲祭の時に敷き詰められたクシャ草に例えられている。アンジャリは両手をあわせて水を受ける仕草であるが、ここでは壁の割れ目から雨期の雨水が盛んに流れ出る様子を言っている。シュラーッダの祭は死者の冥福を祈るための儀式であり、ピンダという団子をいくつか死者の霊に捧げる。ここでは崩れた宮殿の壁土がピンダだと言うのである。
- (35)結局ムーララージャ王は西暦940年から995年まで統治したことになる。
- (36)ヴァーナラーシー(Vānārasi)——現在でもヒンドゥー教徒の間でもっとも神聖な場所とされるベナレスのこと。
- (37)チャトラ(chatra)とチャーマラ(cāmara)——チャトラは貴人の頭上にかける傘で、チャーマラは手に持つ箒のようなもので、どちらも王の権威の象徴。
- (38)ムンジャ王(Muñjarāja)——グジャラートの東、マーラヴァ(マルワ)を支配したパラマラー王朝の王。在位947-約994。多くの文人を宮廷に集め、自らも詩文をよくしたといわれている。これはムンジャ王の繁栄と没落の物語。ムンジャという名は、その名を持つ草の名前からとったとされている。
- (39)プレータ(pretā)——インドの民話にしばしば現れる「生ける屍」。死骸そのものが活動をして、人にさまざまないたずらをする。ある程度の神通力を持っている。
- (40)ガウダ(Gauḍa)はベンガル(インド共和国西ベンガル州およびバングラデシュ)。ダクシナーパタ(Dakṣiṇāpatha)は文字どおり「南への道」であり、北インドと南の半島部の境にあるヴィンドヤ山脈からデカン高原北部に至る地域。
- (41)「望みの神を念ずる」——この書に何度も現れる表現で、死に面して「覚悟を決める」の意。
- (42)クリタユガ(Kṛtayuga)——インド古来の宇宙進化論によると、創造神ブラフマーの一日は1カルパ(kalpa)と呼ばれ、43億2千万年の長さを持つ。夜も同じ長さである。この一日にブラフマー神は宇宙を創造し、夜に体内に吸収してしまう。1カルパの1000分の1がマハーユガ(Mahāyuga)であり、それぞれのマハーユガは4つのユガ(yuga)に分かれる。その4つはクリタユガ(Kṛtayuga)、トレートーユガ(Tretāyuga)、ドヴァーパラユガ(Dvāparayuga)、およびカリユガ(Kaliyuga)であり、それぞれ1,728,000年、1,296,000年、

864,000年、432,000年の長さを持つ。この4つのユガは時代が下るにしたがって人々の敬虔、倫理、体力、体長、寿命、幸福さが低下して行き、カリユガの最後には社会が大混乱して大火と大洪水の後に世界が破滅に瀕するが、この時に救世者カルキン(Kalkin)が現れて世界を再生して再びこのサイクルが始まる、とされている。

このように、本文にある「クリタユガ」は世界のサイクルの中で最もよい期間であり、マーンダートリはその時の名君とされている。

- (43) 「大海に橋を作って、10の口を持つ者を征服した王」——叙事詩『ラーマーヤナ』の英雄ラーマ(Rāma)王のこと。ラーマは自分の妻シーター(Sītā)を奪って逃走した10の口を持つ悪魔ラーヴァナ(Rāvaṇa)をその居城ランカー(Lankā——今のスリランカ)に攻めたが、その時に味方になった猿の王ハヌマット(Hanumat)の協力により、海峡に猿橋を作ってランカーに渡ったと言われる。
- (44) 「ユディシュティラに始まる他の王たち」——叙事詩『マハーバーラタ』に現れるパーンダヴァ族の5人の兄弟のうちの長兄をユディシュティラ(Yudhiṣṭhira)という。その子孫が今のデリーの郊外ハスティナープラを首都としてインドを統治したと言われる。

参考資料

Merutuṅgācārya. *Prabandhacintāmaṇi*.

Śāntiniketan: Śiṅhī Jaina Jñānapīṭha, 1933.

Arai, Toshikazu. *Structural Analysis of the Prabandhacintāmaṇi with Special Attention to the Jaina Values of Kingship*.

(Doctoral Dissertation submitted to and accepted by the University of Hawaii in August 1979)

新井俊一：「ヴィクラマ王物語」

『相愛女子短期大学研究論集』第43巻 平成8年3月発行。

Basham, A. L. *The Wonder That Was India*.

New York: Grove Press, 1959.

Jina Vijaya Muni, ed. *Prabandha Chintāmaṇi of Merutuṅgācārya, Part I*. Śiṅhī Jaina Series No. 1

Śāntiniketan: Śiṅhī Jaina Jñānapīṭha, 1931

Majumdar, A. K. *Chaulukyās of Gujarat*.

Bombay: Bhāratīya Vidyā Bhavan, 1956.

Monier-Williams, Sir Monier. *A Sanskrit-English Dictionary*. Oxford: Clarendon Press, 1899.

Reprinted in Tokyo in 1986.

Tawney, C. H. tr. *The Prabandhacintāmaṇi or Wishing Stone of Narratives*.

Calcutta: The Asiatic Society, 1901.